

論文の内容の要旨

論文題目： 韓国における青年期無気力傾向に関する研究

—日本との比較を通して—

氏名 李 相 蘭

1. 問題と目的

最近韓国では、中学校と高校における授業場面を中心とする意欲低下が増加しつつあり、社会的な注目を集めている。本研究は、韓国の青年に見られるこのような意欲低下が具体的にどのような要因と関連し、どのようなプロセスで生成されるのか、その実態を実証的に検討していくことを目的とする。

本研究では、すでに表に問題行動が表われている病理群ではなく、一般の青年を対象にし、その青年が抱えている潜在的な意欲低下に焦点をあわせる。つまり本研究は、韓国の一般青年のうち、問題行動を引き起こさずに我慢しながら生活している意欲低下の潜在群を対象にし、それによって、行動化の予防策を探るという教育的な側面を注目する。韓国の青年が示す意欲低下を検討するための概念枠組みとして、日本社会における青年期‘アパシー傾向’を参考にした。しかし、‘アパシー傾向’は日本の大学生の意欲低下に限定された用語であるので、本研究では高校生を含む幅広い意欲低下を示す用語として‘無気力傾向’という概念を取り上げて扱うことにした。

したがって、本研究における‘無気力傾向’とは、‘一般青年のうち、中

途退学や退却などを表に示さないものの、内面的にその症状を潜在的に抱き、意欲低下となっている状態’と定義される。

2. 論文の構成と各章の内容

本論文は、全 5 部 8 章にかけて段階的に研究結果を発展していく構成になっている。まず第 1 部第 1 章では、韓国社会における若者達の現状、および韓国における無気力研究の重要性について検討したうえで、本論文の目的と枠組みについて記述した。

第 2 部において、第 2 章では、韓国の青年期無気力研究を行う前段階として、これまで日本および米国においておこなわれてきた青年期無気力傾向に関する論点を展望した。第 3 章では、韓国と日本の大学生を対象に無気力傾向に関する比較研究をおこなった。それを通して韓国の大学生が示す無気力傾向の実態を明らかにし、韓国の青年の無気力を研究する方向性を定めた。その結果、韓国の大学生における意欲低下は、日本のような青年期延期現象というより、動機づけの低下が主たるものであることが考えられた。そこには、受験競争を背景に生じる進学動機の意味づけの不明確さに伴うアイデンティティの混乱が見られた。最近韓国では、高校生を中心に中途退学者が増加しつつある。そのような状況も考慮するならば、高校生を対象とする無気力傾向の研究の重要性が示されるといえる。そこで、本研究では高校生を研究対象とすることを決定した。

第 3 部では、第 2 部において示唆された内容を参照として高校生を対象に質的研究を行い、韓国の高中生における無気力傾向に関するモデル生成を試みた。そのために、まず第 4 章で、韓国の高中生を対象に無気力傾向に関する調査をおこない、典型的傾向を示すインフォーマントを選定した。なお、調査の際には、第 6 章以下のテーマとなる高校生が無気力傾向に関する因果モデルを量的に検討するために、無気力傾向の他に、進学動機の不明確性、進路未決定、自我同一性についてのデータもあわせて収集した。続いて第 5 章では、第 4 章の調査で選ばれたインフォーマントを対象に面接調査を行った。面接データは、質的な研究方法であるグラウンデッド・セオリーを用いて分析し、韓国の高中生に見られる無気力傾向が生成されるプロセスに関する仮説を見出した。その結果、特に、男子高校生が無気力傾向がより複雑な様相を呈していることが示さ

れた。彼らの自我イメージの中には親との共生関係が表われた。それは、韓国社会において男子、特に長男に与えられている扶養義務、親側の依存感や期待感の影響によるもののように考えられた。親の男児に対する期待感の現実的な表明は、成績プレッシャーとして表われており、親子間に心理的な葛藤を引起こす原因と考えられた。また、そこには、時代の変化と共に変わってきている若者達の価値観と、親の支配的で一方的な養育態度との間に存在する世代間のギャップが働いていることも考えられた。

男子高校生は学校側の職業または進路に関する教育について満足しない状況であり、進路の拡散が明確な形で見られた。また進路の問題において、目標設定や目標へ向かって自分を統制する力が弱い点が特徴であった。親との関係性から生じる高いプレッシャーや自我イメージの混乱、および学校側の進路教育に対する不満は、進学動機の不明確性を引起こす要因として作用することが推測された。さらにそれが自らの欲求や要求を意識するのではなく、社会の視線などを意識した進学動機をもたらすということが推測された。不明確な進学動機は、学校生活にも大きく影響しており、集中力の低下となっていた。ひいては防衛的な友人関係パターンを特徴とする不安定な学校生活の原因となることが考えられた。最も、深刻なところは、性格に見られる萎縮であり、強迫行動および観念、現実回避傾向や空虚感が内面に存在していることが考えられた。無気力傾向の高い男子高校生におけるこのような性格面における萎縮は、無気力傾向と密接に関連する状態となっており、あらわれていることが考えられた。

第4部は、韓国高校生の無気力傾向の特徴をさらに明確化することを目的とした。そのような目的のために、第6章では、韓国の高校生を対象として収集した量的なデータを用いて共分散構造分析による因果モデルに関する検討を行った。特に男子高校生の場合、競争的な受験文化を背景にする進学動機の不明確性が、進路未決定を介し、無気力傾向の下位変数である‘自己不全感’を予測する変数であることが示された。さらに自我同一性の未確立の問題は、無気力傾向の下位変数である‘消極・受動’を規定する要因であることが示された。第6章で得られた結果を参考に、第7章では、韓国と日本の高校生における無気力傾向に関する比較研究をおこなった。そこでは、自我同一性の未確立が、無気力傾向の下位変数である‘自己不全感’を規定する影響力については、韓国の男子高校生の方がもっとも強いという結果が得られた。ただ、進学動機が

進路未決定へ正の方向で影響している結果は、両国の男女とも高かった。すなわち、大学へ進学する動機が不明確であることが、進路決定を困難にさせる可能性は日本と韓国の男女高校生とも同様であることが考えられた。

第5部の第8章では、以上の研究結果を総合的に考察し、韓国の青年に見られる無気力傾向について次のような結論が得られた。韓国の大学生の場合、大学へ進学する際にもつ動機の不明確性が大学生活に対する意欲低下に最も重要な要因として関わっていると考えられた。それは、韓国の青年期無気力傾向は、高校の時期にすでに存在することを示唆するものである。高校生の示す無気力傾向は、特に、男子高校生の方がより深刻であり、進学動機の不明確性の他に、進路が未決定なままである状態、自我同一性がまだ確立されていないことが関わっていると考えられた。進路問題や自我同一性など青年期発達課題が未確立となっている背後には、受験競争によって生じたストレスの高い学校生活のパターンが存在していることが考えられた。また、両親から与えられる成績プレッシャーおよび期待感、親の頑固な態度と若者の価値観との間に見られるギャップが、親子関係の葛藤を引き起こす要因となっていると考えられた。

このような背景によって生じる無気力傾向を示す青年には、強迫傾向、回避・空虚感および対人関係における消極性など、性格における萎縮が見られた。

3. 今後の課題

本研究の第3部の質的研究の結果からは、韓国の青年における無気力傾向は、単に本人の内面的要因によって生じただけでなく、家庭、学校、および社会環境という生態学的なシステムによって生じるものとなっていることが考えられた。そして、青年が示す無気力傾向に対応する際には、家庭、学校および社会が協力して対応策を模索して行く必要が示唆されたといえる。このような生態学的なシステムについては、今後、量的研究において扱うことにする。なお、本研究で得られた結果は、今後、臨床場面においてより多い無気力傾向の高校生を対象に検討を重ねていくことも求められる。それによって、韓国社会の文化的な背景の中での特徴がさらに明確となり、韓国の青年における無気力問題の実態に対する理解をより深めることが期待される。